

# 日牟禮八幡宮

天降りの神の誕生の八幡宮も  
ひむれの社になびく白雲

藤原不比等



## 御由緒

伝記によると、第十三代成務天皇が高穴穗の宮に即位(西暦一三二一年)した時に、武内宿禰に命じてこの地に、大嶋大神(地主神・大嶋神社)を祀られたのが鎮座の始めと伝えられています。

應神天皇六年(二七五)天皇近江行幸の折、奥津島神社に参詣されて還幸の際に宇津野々辺(神社の近く)にて御小憩、御座所を置かれた。その後、御仮屋の跡に日輪の形を二つ見ることがあり、祠を建てて「日群之社八幡宮」と名付くとあります。持統天皇五年(六九二)藤原不比等が参拝し、詠んだ歌に因み「比牟礼社」に改めたことも伝えられています。

正暦二年(九九二)には、第六十六代一條天皇の勅願により、法華峰(八幡山)に社を建て、宇佐八幡宮を勧請し、上の八幡宮を。そして寛弘二年(一〇〇五)遥拝の社を山麓に建て、「下の社」とありす」とあります。

天正十八年(一五九〇)豊臣秀次公が法華峰に八幡城築城のため、上の八幡宮を下に社に合祀し、替地として日杉山に祀る計画でしたが、秀次公の自害により、日杉山には建設されず、現在の如く一社の姿となりました。

明治九年(一八七六)に郷社、大正五年(一九一六)には県社に列せられ、昭和四十一年には神社本庁別表神社に加列、神社名を日牟禮八幡宮と改称しました。

皇室の崇敬とともに徳川家康公が慶長五年(一六〇〇)関ヶ原決戦の後参拝、武運長久を祈願するなど、時の将軍家も篤く崇敬。近江商人の発祥の地である事から、近江商人の信仰も篤く明治三十二年(一八九九)神社の神徳をたたえ観世流の能「日觸詣」が作られた。大願成就、厄除開運、商売繁盛の御利益があり、近江の守護として、湖国の中心に祀られる八幡さまであります。



## 【電車でお越しの方】

- JR西日本の琵琶湖線(東海道本線)で「近江八幡」駅にて下車後
- 近江鉄道の八日市線で「近江八幡」駅にて下車後
  - 駅北口より近江(鉄道)バス
    - ◎ 番のりばから「長命寺」行きに乗車→「大杉町」下車(下車直前に当社の大鳥居前を左手に通過します)
    - 徒歩の場合は約30分

## 【お車でお越しの方】

- 名神高速道「竜王」インターより15 km
- 境内の馬場にご駐車ください

## 日牟禮八幡宮社務所

近江八幡市宮内町 257  
Tel.0748-32-3151 Fax.0748-32-8665

<https://himire.jp/>

# 御祭神

譽田別尊（ほんだわけのみこと）

人皇第十五代應神天皇の御神靈。

息長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）

應神天皇の御母君、

摂政の宮として統治された神功皇后の御神靈。

比賣神（ひめがみ）

田心姫命（たごりひめのみこと）、湍津姫命（たぎつひめのみこと）、

市杵嶋姫命（いちきしまひめのみこと）の御神靈。

この三姫神を玉依姫とも称し奉ります。



拜殿

鳩は八幡神の御使い



安南渡海船

正保四年（一六四七）豊川孫兵衛筆  
近江商人安南屋西村太郎右衛門が安南（ベトナム）にて財をなし、帰国した所、領国の海上で盗賊に誘はれ、自らの姿を給馬にして、郷里の三社に奉納した物。重要文化財に指定されている。

# 左義長祭

左義長はもとも中国からきた正月行事で、わが国では仁明天皇承和元年に、鎮護国家、五穀豊穰を祈る祭りとして行われるようになりました。

織田信長の時代、安土城下で毎年正月に行われており、信長自らも参加していたそうです。信長の死後、豊臣秀次が近江八幡に城下町を開いたと同時に、祭礼として定着しました。

毎年三月十四・十五日に近い土日曜日に行われます。

左義長は十二段祝義といわれます。本体は、束ごとに新薬で編み十二段に重ねられた、高さ約三メートルの松明、上部に杉葉の頭、その上に笹を立て、赤紙や扇、くす玉などで飾り、頭の上には火のぼりという御幣をさします。中心面には毎年の干支を付けますが、それを「ダシ」とよび、手間や経費を惜しまず立派に作ります。担ぐ人は揃いの半纏を着用し、化粧をして、拍子木を持ち下駄を履いて勇ましいかけ声と共に担ぎ踊ります。趣向を凝らした左義長を奉火し神に捧げることで、二日間わたる祭りは閉幕。子どもからお年寄りまで町ごとに参加、見物の多くの人々にぎわう、滋賀を代表するお祭りです。

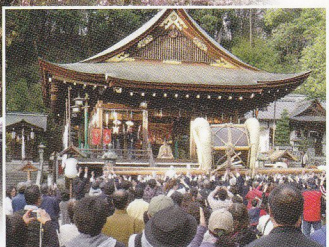


# 八幡祭

應神天皇が御母君神功皇后の生地、近江志長村（現在の米原市）をお訪ねになられた時、琵琶湖を船で渡り、南津田に上陸。南津田の七軒の家が、ヨシで松明を作り、火を灯して道案内したのが八幡祭の原型とも言われています。

旧村落十二郷により地域の絆を高め、五穀豊穰、家内安全を祈願する祭典で、毎年四月の十四日・十五日に行われています。十四日（宵宮）は松明祭と呼ばれ、現在では十メートルを超える松明も作られ、大小併せて二百本近い松明が古式に則って順次奉火され、馬場は火の海となります。十五日（本祭）は、太鼓祭とも呼ばれていて、各郷自慢の太鼓、太きいもので、直径二メートルを境内で若衆が担いで練り歩き、打ち鳴らされる太鼓の音は、夕刻おそくまで近郷に響き渡ります。

※千年以上の歴史を誇る八幡祭は、四百年余の歴史を伝える左義長祭は、県下有数の火祭であり、国選択無形民俗文化財に選定されています。



# 主な建造物

本殿：木造二間社流造千鳥破風向拜付 二二四㎡

寛弘二年（一〇五）建立以来数回に亘り

改修、再建を重ね、文化四年（一八〇七）改築、

明治十四年（一八九一）増設

拜殿：木造入母屋造 二六㎡

文治三年（一一七）源頼朝公近江佐々木氏に命じ建立。

元文二年（一七三七）再建、文化二年（一八〇五）改築。

楼門：木造入母屋造 一六㎡

延文四年（一三五九）六角氏建立。

四方猿の御門と称す。安政五年焼失、再建。

昭和四十五年（一九七〇）上部焼失翌年復興（銅板葺）

鳥居：木造高心五間、柱間四間

元和二年（一六一）建立。

数回の改修を重ね、昭和四十一年（一九六六）解体修理。

手水舎：木造入母屋造 二九㎡

寛文九年（一六六九）銘手水鉢あり。

安政五年（一八五）再建。

梁川星巖筆の不知洗雲心の銘あり。

能舞台：木造入母屋造 一八四㎡ 瓦葺

明治三十二年（一八九四）新築。

鏡板の老松の絵は、北近江光輪岡田の筆。

給馬殿：木造切妻屋造 四〇㎡ 瓦葺

文政十二年（一八〇九）再建。

明治十六年（一八八三）改築。

境内社：大島神社、八坂神社、恵比須神社、

繁元神社、繁元稲荷、常盤神社、岩戸神社、

宮比神社、天満宮、愛宕大神、秋葉大神、子安大神

右、建造物分殿は、従来は檜皮葺であったが、

昭和五十四年（一九七九）屋根葺替工事を実施。

現在の様に、軒付檜皮平地銅板葺に改修した。